

## 3837 地球のかおり：「浮島の王宮」(産経新聞)・心模様

アルプスの南山麓に散らばるイタリアの湖水地方。

ファッションの仕事をしていた時、

湖水地方の一つ、水の美しいコモ湖を訪ねたことがある。

イタリア・コモ湖は、染色で有名な町。

現在の夢挑戦を始めた時から、アルプスの国境地帯は、厳しいが、大好きな領域。

前は、自動車で、スイス・ブリークから、アルプスのシンプソン峠へ。

今回は、マッターホルンはじめ、スイスアルプスを探訪。

頑張ったご褒美に、スイスに荷物を預けて、列車で、国境を通過。

憧れの、マジョーレ湖を目指した。

アプローチは、列車で、そして、素朴なストレーザの駅に下り立った。

なんとも言えない風情のある駅。建物の木や石のぬくもり、

歴史を感じるストレーザの駅。

イタリアらしい。ホームにある丸テーブルで、老人が新聞を読んでいる。

駅員？ でもなさそう。改札には人もいない。

自由に通行できるプラットホーム。年季の入った、小さなトランクが一つ。

映画のワンシーンのように感じた。

くらく久楽は、旅人になると、変身する。

自分でもわからない。解放されるのだろう。

人が見ていようが、見ていまいが、日本人としての礼儀作法やプライドは、失わない。

何か楽しいことが起こりそうな予感。

身体一杯に、深く深呼吸した。

次に、駅の売店、コーヒーのカウンター。独特の雰囲気。

直ぐに立ち去るには勿体ない。

コーヒーを注文。私自身が、珍しい客人のようである。

軽く、チャオ！ ボンジョルノ！ やあ、こんにちは。夜の挨拶は、ボナセラ！

笑顔で話せば、通じるものである。ヒヤリングは出来ないが、

筆談なら、少し練習してきた。

3月上旬の湖水地方は、閑散期。行き交う人も少ない。

数多くの芸術家や作家が、愛したマッジョーレ湖。

北の一部は、スイス領。

ミラノの北50キロに位置している高級リゾート地。

スイス・サンモリッツとは違った雰囲気。軽い気持ちで訪ねた。

特別に予定は決めていなかった。

歴史上の人物が憧れたこの地に、身を置いてみたかった。

ただ、それだけの理由で訪ねた次第。

立ち去りがたい雰囲気。私の心をとらえた。

閑散期でもある。幸い、高級ホテルが格安。予約も何もしていなかった。

予算もある。難しいかも。宿泊できるとは思わなかったが、尋ねるだけ、訪ねてみよう。

フロントマンは、実に親切で、平等で、先入観なく、実に見事な対応だった。

質問から始まり、興味を持ってくれた。

視線が、私のカメラに行ったのを見逃さなかった。

片言の英語が通じ、危うい片言のイタリア語も使った。

ヒヤリングは難しいし、聞き分けができないので、大切な話はできない。

身振り手振りの、ボディランゲージ。

その後、話が多方面にわたった。

スイスもイタリアの街も、方々、訪ねた実績がある。

日本人にしては、希有の存在。暇もあったのかもしれない。

相手をしてくれて、話の花が咲いた。

実際、観光地など訪ねて、彼よりよく知っていることもあった。

仕事で、ミラノは何度か訪ねている。マッジョーレ湖の位置の地図を下記に。

赤字マジックは、ある時の実際訪ねた足跡。

この地図は、イタリアで購入した、分厚い道路地図からの資料。

話が弾んだ。アピールもある。勘違い？ メディア関係者と思ったかもしれない。

これは、ワシントンでも体験。アメリカの音楽家、・ピートシガーのパーティ。

中国の取材陣と間違われた。カメラマン？ プロ仕様の複数のカメラを身につけていた。

セキュリティーも甘かったのか、ホホワイトハウスで、そんな体験がある。

話が、あちこちそれるが、2017年12月～2018年1月。1ヶ月間、フランス・パリに滞在。

時期も時期、駅での取材。ある黒人のガードマン？の勘違いで連行された。

その時、機関銃を携帯した4人組のチームほか、

大勢引き連れて、駅事務所へ。一般人も、何が？と集まってきた。幸い、英語が通じた。

その時、カメラはデジタル。画像を見せ、英語が通じたので、説明。

責任者が、笑いながら、すぐに解放してくれた。パリは、誰もが神経過敏になっていた。

話を元に戻して、料金も格安。規則もあるだろうが、

裁量権もあるのか、特別待遇してくれた。

それは、部屋のチェンジ。この作品は、宿泊した部屋の窓からの光景。

高層のバルコニーから、眼前の夜景が輝いた。

普通、宿泊できないほどの豪華な部屋である。ベランダ？ いや、バルコニー。

そこには、素晴らしいおしゃれなテーブルと椅子。運のいい男である。

カメラを携帯していたことと、片言なが、訪問の目的に配慮しての好意だったと思う。

最初、日帰りでもいい。日帰りは難しいが、そんな軽い気持ちで、マッジョーレ湖を訪ねた。

なんともラッキー。気に入ったので2泊させていただいた。

その後も、大歓迎してくれた。相性というか、馬が合うというか、感謝、感謝である。

実に、いろいろなことも、おしえてもらった。単なる情報ではない。

そして、久楽の実践。探訪が始まった。

著名な芸術家や作家、ナポレオンまで、この地に来て、構想を練ったという。  
前置きが長くなりすぎた。話を元に戻して、眼前の光景の説明を。  
湖畔である。17世紀のボッロメオ家が三つの島を所有。  
その一つ、ベッラ島が有名だそうだ。  
庭園は、バロック様式。階段式の庭が広がり、見事とのこと。訪ねてみようと思う。

湖畔には、遊歩道がある。夕暮れの景観は、見事だった。  
なかなか霧が晴れない状況がつづいた。  
日本人の私には、風情を感じる大好きな光景。風も少し感じる。  
時に、顔をなぜる風が、なんとも心地良い。  
そんな有難い印象をもった後だけに、この夜景は、ロマンティック。  
壁面のツタまで好ましく思える。思い出に残る素敵な夜。  
ただ、一人なのが勿体ない。夜、街にも出かけた。  
経営者やアーティストは孤独な領域にあるのが普通なので、納得している。  
楽しく創意工夫。小さなレストランで、ワインや食事。  
マッジョーレ湖で獲れたという魚料理。

厳しいスイスでの戦いの後だけに、そのギャップが、何とも心楽しい。  
同じものを食べても、味わいが違うから不思議である。  
小さな街である。隅々まで歩き回った。  
翌日、モッタローネ山も訪ねた。旅に同じ場面がない。この一枚のワンショット。  
本来なら、記憶は風化するだろうが、作品や文章で、心や思いが残っている。  
産経新聞の連載で紹介させていただけるなど、夢の夢。  
実現するとは、感謝。感謝。感謝である。  
この旅の終わりに、スイスに戻って、もう一仕事ある。

こんな出会いがあるから、ひとり旅は面白い。反対の出来事もあるが。  
久楽の選択肢。何の不満もない。  
何事も、一長一短。腹、八分目、いや、六分目で満足した方が、心身にはいい。  
ラッキー、スマイル、オン、ミー、だった。

~~イタリア・ストレーザの地図~~

